

住井するゑとその文学の里(五十六)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

新制の牛久町誕生

梶提示案は「牛久村・岡田村・荃崎村三力村合併」

茨城県内には、戦前から零細な村が多かった。例えば、事務職員を一人も置くことができず、村長と助役、収入役の三役だけで一切の事務を処理していた村や、村会議員の得票数がたったの8票で当選できたほどの小さな村もあった。

大東亜戦争に敗れて(昭和20年・1945年8月)間もない昭和28年(1953年)9月、政府が3年間の時限立法として町村合併促進法を公布すると、茨城県では政府のこの方針を遂行するにあたって、早速、知事(友末洋治)の諮問機関・町村合併促進審議会(会長 鈴木一司県議会議長)を設置した。

同審議会の答申案に基づき、県は稲敷郡の場合、34町村を11乃至12町村に統合する方針を立て、西部に位置している牛久・岡田・荃崎の各村に対して三力村合併案を提示してきた。



この案は、事前に周知されていたので、これより先の同年の5月に、牛久・岡田・荃崎の村議会を以って、合併を前提としての運営協議会が設置されており、同時に各議会においても三力村合併についての議論が展開されていた。合併への気運が最も高まった8月1日には、牛久岡田荃崎合併協議会が発足、この日第1回協議会が神谷葡萄園事務所(牛久シャトー)において開催され、岡田村の川村衛村長を会長に選出して三力村合併に向けて本格的な協議に入った。牛久村長は吉田虎次郎、荃崎村長は高野穎一郎であった。

荃崎村では、高野村長の下で、7月28日に村役場において、村議会議員、村関係各種団体役員を集めて、三力村合併調査会結成に関する協議会を開催した。ところが、4日後から順次実施された合併の賛否を問う世論調査2度、住民投票2度、そのいずれの場合も賛成票より反対票が多数であったため、合併促進派の高野村長は牛久岡田との合併を断念せざるをえなかった。

一方、牛久岡田二力村合併への諸作業が着々と、しかも迅速に進められ

て、翌年の昭和29年(1954年)1月11日に、牛久町(牛久村はこの年1月1日を以って一村で町制を施行した)岡田村合併促進協議会が組織された。協議を重ねること数回で、同年4月1日を以って合併を施行することに決した。同年2月5日に、牛久・岡田両議会においても、短時間のうちに合併決議が行われた。牛久町議会は定員16名で全員出席、長岡嘉平次議長(副議長 福島正則)の下で、合併議案に対して、満場異議なく賛成となった。岡田村議会は定員22名中、2名欠席で、寺田行男議長の下で、合併議案に全員賛成であった。

昭和29年4月1日、新制の牛久町誕生となった。

奥野村が牛久町へ編入合併

昭和30年(1955年)1月8日の午前9時より奥野村役場において村議会が開かれた。定員16名全員出席し、主たる議案は、第27号奥野村を牛久町に編入合併することについてであった。休憩後、午後1時10分より再開され、形式通り議案の趣旨説明があつて、質疑応答の末、合併に関する議案の議決に入った。横瀬繁議長は、賛成8名、反対7名、賛成多数により議案通り議決すると宣言した。

合併の形式―編入合併

合併の施行日―昭和30年2月10日
奥野村は、本橋義一村長の下で、梶提示案に則り、東に隣接する君賀村(合

併して江戸崎町)などの合併へ向け諸作業が進められていたのだが、村が賛成反対で二分、合併の機を失っていたのだった。

奥野村の幕を引いた本橋元村長が、筆者に昭和51年(1976年)の秋に、「私は岡見の生まれで、川村町長とは幼馴染だった。気心の知れた仲だった川村町長に頼んで合併してもらった」と語ってくださった。

【新制牛久町建設の基本方針】
将来常磐線の電化を想定し、住宅の建設と大工場の誘致を図るとともに就業の改善を図る。諸産業の開発と相まって、社会的、経済的、文化的に飛躍的發展を図って、住民の福祉を増進し、農商工を一体とした町の振興を図る。



→新制牛久町の初代町長川村衛。新制牛久町誕生に伴い執行される町長選挙に際し、川村衛以外に立候補者がなく、川村の無競争当選となり、昭和29年5月5日に就任する。